

Marianne Moore のヨーロッパ在住詩人との交流と中国への関心

上野 葉子

I. はじめに

Marianne Moore (1887-1972) は 1911 年と 1927 年にイングランドやスコットランドなどを旅行しているが、それを除けばほとんどアメリカを離れることはなかった。しかし、彼女のモダニストとしてのキャリアの中で、ヨーロッパに住む詩人や作家との交流は重要な位置を占める。一方で、Moore の詩の中には中国の美術品や文化が登場するものもある。本稿では、この 2 点で Moore の活動、関心が大洋を越えて広がっていたことを紹介する。

II. 1909 年～1921 年 ヨーロッパ在住詩人への関心、交流

Moore は 1907 年から Bryn Mawr College の雑誌に詩を発表していたが、その詩は広く世には知られていなかった。その頃のアメリカでは、19 世紀のロマンティズム、センチメンタリズムを引き継いだ詩が主流だったが、Moore は食欲に新しい文学の動向の情報を集め、ヨーロッパにいたアメリカ詩人たちにも注目していた。Patricia Willis によれば、Moore は、特に、Ezra Pound の詩が 1909 年に初めてイングランドで出版された時から興味を持っていた(5)。Linda Leavell によれば、Moore は、1911 年のロンドン旅行の時には、Pound の本を出版した Mathews の本屋に出かけ、Pound の本 3 冊を買った(115)。そのうちの 1 冊 *Canzoni* には Pound に対する批評の抜粋が載っていて、その抜粋 “immediately compels admiration by his lack of self-consciousness” の最後の 3 語に、Moore は下線を引き、余白に大きな感嘆符をつけた(Willis 6)。このように、ロマンティックな個人的感情の吐露に決別するというモダニストとしての信念において、Moore は Pound と立ち場を同じくしていた。

Leavell によれば、1912 年に Pound、H. D.らが始めたイマジズムを知ってから、Moore はそれらの詩が掲載された実験的な雑誌に詩を送るようになり、1915 年春には、*Poetry* と *The Egoist* に詩が掲載された(5-6)。イギリスにいた H. D.は、Moore が 1915 年に *The Egoist* に発表した 7 つの詩を高く評価し、1916 年 8 月に短い批評を発表している。これは、Moore の批評としてもっとも早い時期に発表されたものである。H. D.は、さらに、1920 年に Bryher と共にニューヨークに立ち寄った時に Moore と会い、Moore の詩集を出版したいと申し出た。Moore は、本として出すには自分の書いたものは貧弱すぎると言って断ったが、H. D.と Bryher、Robert McAlmon は、1921 年 7 月に Egoist Press から Moore の最初の詩集を出版した。この詩集は、残念ながら、賞賛よりも酷評を多く招く結果になったが、H. D.たちが、自分と同じ立ち位置にいる Moore の詩作を支援しようとしたことがよくわかる。

H. D.と同じくヨーロッパにいた Pound が、1918 年 3 月に、雑誌 *Others* のアンソロジーの書評で Moore と Mina Loy の詩を *logopoeia* と呼んで評価したこともよく知られている。Pound は Moore をアメリカの新しい詩人の 1 人として支持し、ヨーロッパの地から、*little magazine* の編集者たちに Moore の詩を載せるように働きかけていた。

Celeste Goodridge が述べているように、この時期はモダニズムが生成過程にあり、まだ十分な評価を得ていない時期であったため、新しい詩を生み出そうと志す詩人たちは、お互いに協力し合いながら、共通の事業であるモダニズム詩の価値を世に示す必要を感じていた(6-7)。Moore の詩に接した H. D.や Pound は、自分たちの同志としての Moore をサポートし、ともにモダニズムを推し進めていこうとしていたのである。

III. 1925 年～1929 年 *The Dial* の編集

Moore が 1925 年から 1929 年まで関わった *The Dial* の編集もまた、ヨーロッパとの関わりの深いものであった。Leavell によれば、特に、最後の 2 年半は実質的に Marianne Moore が編集の中心となっており、*The Dial* は Moore の雑誌と言っているものだった(243)。

The Dial は、Scofield Thayer と James Sibley Watson が 1919 年に買い取ってから、ヨーロッパとアメリカの優れたモダニズムの作品を発表する場となり、高い評判を確保していた。Moore が *The Dial* を引き継いだあとも、それまで寄稿していたヨーロッパ在住の人々の作品や文章、美術が引き続き雑誌に掲載された。

Moore が果たした役割の中でもモダニズムに大きく貢献したと思われるのは、Pound の扱いである。Pound は、1920 年から 1923 年まで *The Dial* の foreign editor として William Butler Yeats, Marcel Proust, T. S. Eliot などの海外の詩人、作家の作品を多く集めてくる役割を果たしており、その編集に影響力を持っていた。しかし、当時の *The Dial* の編集者 Thayer が *Cantos* の掲載を断ったことなどから、1923 年にその関係は決裂していた。

Moore は、雑誌編集の仕事を受け継ぐと、まず、他の編集者である Watson、療養中の Thayer を説得し、さらに Pound に何度も手紙を書いて説得し、2 年がかりでようやく Pound と *The Dial* の関係を修復した。Pound は、1927 年に *The Dial Award* を贈られ、*The Dial* の最後の 2 年間には、ほぼ毎号に Pound の書いたものが掲載された。

Jayne E. Marek や Victoria Bazin が指摘しているように、もう 1 人、Moore が *The Dial* に載せるように尽力した

重要なモダニストに、Gertrude Stein がいる。編集者 Watson と Thayer は Stein を評価しておらず、*The Dial* にはその作品を全く載せたことがなかった。また、Thayer は Stein を訪問した際の無作法なふるまいで、Stein を怒らせていた。Moore は、1926 年 2 月に誌面に空きができた時、Stein の長編小説 *The Making of Americans* の書評を 1 週間で書き上げ、*The Dial* に載せた。当時、Stein の作品は広く話題になっていたものの、真剣に理解しようとする試みは多くはなかった。Moore の書評は Stein 自身のことばを使いながらその特徴を指摘していく丁寧なもので、Stein は、その書評に対して感謝の手紙を書いた。これを契機として Stein は *The Dial* への作品掲載を承諾し、美学的な論文“Composition as Explanation”を送った。こうして、Stein の作品が初めて *The Dial* に掲載された。その後、Moore は、Stein の心情に配慮しながら雑誌の紙面の限界を丁寧に説明した上で、Stein の特徴が発揮された作品の掲載を依頼し、実験的な中編小説 *A Long Gay Book* の最初の 10 ページを *The Dial* に載せることができた。

The Dial は、*The Little Review* などの little magazine に比べて保守的な側面もあったが、大きな影響力があり、約 6500 の購読者数をもっていた。*The Dial* は、それまで同人誌的な詩でしかなかったモダニズムをキャンノンとして確立させた雑誌であり、また実験的な作品をより多くの一般的な読者に普及させる役割を果たしていた。

この *The Dial* の影響力を考えれば、*The Dial* に Pound や Stein の著作を載せることは、この詩人たちがモダニズムを代表する優れた才能であることを広く社会に示す上で、大きな意味があったと考えられる。Moore は、辛抱強い説得と和解という手段を使って、Pound や Stein というモダニストを世に認めさせる手助けをした。Moore の詩の評価が定まっていなかった時期には、H. D. や Pound が Moore の詩の評価を高めるようにヨーロッパで尽力したが、Moore が *The Dial* の編集者となった時には、今度は Moore がヨーロッパに住む詩人の優れた作品を社会に紹介し、大洋をまたぐモダニズムを推進する役目を果たしたと言える。

IV. 中国への関心

Moore は若い頃から中国の文化、特に美術に興味をもっていて、詩や散文の中で中国の美術品に触れている。特に 1934 年に *Poetry* に掲載された“Nine Nectarines and Other Porcelain”では、中国の皿に描かれたネクタリンが中心的に扱われている。この詩では、“Yu”という桃のようにこのネクタリンが死を防いでくれ (“eaten in time prevents death”) (Moore 117)、また、「帝国の幸福は、長寿をもたらすこの桃にある、桃はその幸福を永遠のものにする」 (“Imperial / happiness lives here / on the peaches of long life / that make it permanent”) (Moore 118) と書かれていて、皿に描かれたネクタリンのようすが、永遠の幸福を表す理想郷の風景のように説明される。

この光景と対照的に、6 連目では西洋で作られた陶磁器の絵柄が説明される。フランスのディナープレートには狩猟や家庭の場面が描かれ、イングランドの陶器には長靴 (“jack-boots”) (Moore 118) をはいた軍人、家畜、クジヤク、絵付け師 William Billingsley が始めたシャクヤクのようなバラが描かれている。こうした描写の後で、中国の皿には “the spirit of the wilderness” (Moore 119) があると述べられることから、ヨーロッパの皿には、狩猟によって自然を侵犯したり野生の動物を家畜として人間の都合に合わせて飼育しているようすが描かれていて、“wilderness” が失われていることが示唆される。“jack-boots”は植民地を支配するイギリスの軍勢力、さらには当時台頭していたナチス・ドイツをも連想させ、西洋文明の強権的な側面を表すイメージにもなっている。

詩の最後では、中国の皿に描かれた、「ネクタリンを愛する麒麟」(Moore 119) が登場する。伝説上の霊獣である麒麟は、穏やかな性質で、君主が仁のある政治を行う時に現れる神聖な生き物とされている。つまり、この皿には、長寿をもたらす帝国を幸福にするネクタリンと、王の優れた政治を象徴する麒麟が穏やかな姿を見せていて、自然が人間に支配されることもなく、徳高い王の統治下にある幸福な国の、夢のような情景が描かれていると言える。その意味で、この詩は、西欧の文明よりも中国の文化を理想化して示すものになっている。

Bazin が指摘するように、Moore が購読していた *Illustrated London News* には、1931 年の満州事変以降西欧流の近代化を成し遂げた日本と、近代化の点で後れを取る中国との比較がしばしば取り上げられていた。Bazin は、中国は近代化への抵抗の象徴であり、中国の古い美術品は、商品でありながら強力なエキゾチシズムを備えていて、そのため、西欧の推し進める進歩や物質主義と対抗しうる永遠の真実の空間、精神性の場となったのだと説明している (182)。このように、Moore は、中国を西欧より優越性をもつものとして夢想し、伝説に包まれた理想の空間として描いている。この詩で描かれるのは、東洋そのもののリアルな姿というより、西欧から見た美化された東洋であり、エキゾチシズムの要素が色濃く感じられる。

(引用文献)

Bazin, Victoria. *Marianne Moore and the Cultures of Modernity*. Ashgate Publishing, Ltd., 2010.

Goodridge, Celeste. *Hints & Disguises: Marianne Moore & Her Contemporaries*. Iowa City: Iowa UP, 1989.

Leavell, Linda. *Holding on Upside Down: The Life and Work of Marianne Moore*. Farrar, Straus and Giroux, 2013.

Moore, Marianne. *New Collected Poems*. Edited by Heather Cass White. Farrar, Straus and Giroux, 2017.

Willis, Patricia C. “Marianne Moore and Ezra Pound, 1901-1905.” *Marianne Moore Newsletter* 3. 1979, pp. 5-8.